# 全国同人雑誌評

今回から、小説優秀作とは別枠に、評論や歴史小説など文芸思潮に転載させてほしい作品を推薦作として推挙する道を開いた。まほろば賞としての枠に入らない取り上げ方を新たに作ることを感じてのことである。御了承と御理解をいただきたい。

●**「北方文学」**（新潟県）79号

「北方文学」は初めて読むが、充実した内容を備えた北陸の雄と言える優れた同人誌である。装幀もいい。腰のすわった評論群が揺るぎない文学の基軸をなしている。流行や当世の浮薄な傾向や形にとらわれず、自由に奔放に書き紡いでいるところに、文学の真の翼を保持した矜持が窺われる。「泉鏡花、『水の女』の万華鏡（二）」（徳間佳信）、「ヘンリー・ジェームズの知ったこと（二）」（柴野毅実）、「２０１Ｑの天使たち」（鎌田陵人）、「和歌をめぐる二つの言語観について」（石黒志保）など快い文章探索の滑空感に満ちている。「新潟県戦後五十年詩史」（鈴木良一）も労苦の上に積み重ねられた貴重な記録で、残るべきものとしての光がある。

小説に傑出した作品があって、読み耽った。柳沢さうび氏の「かわのほとり」である。ストーリーは父なし子を生

んでしまった女性が赤子の泣き止まないのに困っているところへ、ある医師の男が手を貸し、互いに思いを寄せるというシンプルなものだが、全体に幻想的な雰囲気の中に、描写がすばらしい。泣き止まない子供が男の手当で泣き止んだとき、「静かになると、風が川柳の茂みを揺らし、水が川底の段を落ちる音が混然と、途切れることなく見寿（みず）とカワセの間を流れる」と受ける描写に刃のような冴えがある。ラストシーンで男が主人公の見寿（みず）を送って行くときの「叢雲（むらくも）の間の歪（いびつ）な月が映る水から発する泥の匂いが、息苦しいほど暖かい闇をしんと埋めている」という描写も、男女の内面の熱を表して一期一会の世界の彫琢を深めている。当今これだけの描写力を持った作家がいるかと思われるほどの卓抜した筆である。だれの子を宿したかわからないその朧（おぼ）ろさも、縁の幽遠さを匂わせていい。全体に幻想が





生きることの希薄さとよく繋がっている点に、すでに深い世界を捉えている奥行きがある。このような書き手がいることは大きな喜びである。一つだけ難を言えば、結末で医師の男が簡単にその子に腎臓移植をしてしまう部分である。全体の幻想の中に死も含まれているからこそ、この幻想が生きているのである以上、ここまでやらなくても、もっと単純なもので死を象徴させることはできるだろう。直してほしいが、このままでも十分に優秀作品に値する。

「賜物」（新村苑子）は自分の息子がいじめで死ぬ話だが、会話など無駄な部分が多すぎる。せっかくの重い題材が周囲の人間の浮薄な言動で生きていず、焦点が結ばれていない。力のある書き手と見られるが、この作品に関しては推

敲不足だろう。

●**「文芸復興」**（東京都）38号

「文芸復興」はキャリアのある書き手が揃っている。文章文化に根を張った基盤の重みが感じられる誌である。読ませる作品が多い。重鎮の会田武三氏の追悼特集も組まれている結束の固さもそれに根ざしているように想われる。

この誌も粒揃いだが、特に読まされたのは、森下征二氏の「泰衡の母」と堀江朋子氏の「やおよろずの恋」である。「泰衡の母」は、奥州藤原三代の、ミイラとして残る泰衡の顔に異様な刀傷があることを考証推理していく前半と、その母と頼朝の対面における滅ぼした者と滅ぼされた者との内面の激しい切り合いをフィクションにした後半とで構成されるが、説得力のある考証もおもしろいし、頼朝と泰衡の母成子（しげこ）の心理の激突も鮮やかである。結局、一族を滅ぼした泰衡への成子の怒りと屈辱によって泰衡の首へ斬りつけるのだが、推理の見事さと、クライマックスへの駆け昇り方の激しさが、考証を超えて生きた読み物にしている。また当時の源氏の棟梁としての政治的立場や野心、後白河法王との駆け引きなどよく捉えていて、歴史知識の豊かさが時代の動きを生動させている。頼朝が生きている。ジャンル的に小説とは言いにくい面もあるが、多くの人に読んでほしい熱量がある。推薦作としたい。

もう一つの作品「やおよろずの恋」は、文章の味がよく、

これは相当な書き手でないと自然な流れの中にこのようなきめ細かな心理をちりばめることはできないだろう。つい読まされる流れの良さは、落ちる紅葉を浮かべて流れる川面を想わせる。あらすじは年輩の女性司書とリチャードという三十八歳の白人男性の恋であるが、この異質な取り合わせが無理なく展開していくのは筆者の手腕である。二人を結ぶものがドルメンなどの古代石器文化である遠い歴史の遺物であることもロマンを乗せやすくしている。これは筆者自身が古代遺跡に造詣が深く、長年の情熱の持続があるからこそ生きてくるサイドの流れだろう。恋愛の引き合う力が、そのままヨーロッパと奥州をつなぐ二人の古代へのロマンと重なるところに、この恋愛の鼓動部がある。ただそのかけ離れた石器文化の夢が遠すぎる妄想の危うさをもこの恋愛は胚胎しており、地球の裏側との距離が、保守に溶け込む結末を用意する。壮大になり過ぎる夢の翔りが、魅力でもあり、根を細くしていることも否定できない。準優秀作。

●**「人間像」**（北海道）106号

「人間像」は一八八号を出す北海道同人誌の雄。今号は妹尾雄太郎氏がノーベル文学賞受賞作家の作品を批判した「カズオ・イシグロ『浮世の画家』を読む―戦争責任をめぐって―」が特に重みがあった。氏は「浮世の画家」の主人公がほんとうに戦争の被害とその悲惨さを受け止めているのだろうかという疑問から始まって、カズオ・イシグロの回顧姿勢の曖昧さに言及していく。戦争反省を題材にした例えば高橋和己の「散華」など日本の作品を提示し、比較しつつ、「浮世の画家」のぬるさを指摘する。「浮世の画家」は戦争中、政府よりに戦争を協力する姿勢で描いた画家の戦後の変節と反省を軸にしているが、似た画家の藤田嗣治などの弁明も引き合いに出しながら、変節のうしろめたさを浮き彫りにしていく。結局当時は文化人も含めてだれもが変節を余儀なくされたのだが、特に戦争協力の立場で動いた者が、戦後ことさら浮き上がり、糾弾に晒される事情もよく調べて書かれている。それらを鮮明にし、戦後の事情を明瞭に比較しつつ、なお重要な点が抜け落ちている「浮世の画家」の欠点を指摘する。特に最後の、建設の音の中で未来を想い、そこに過去の過誤を流し埋めようとする終わり方に、「この程度では何も反省していることにならないじゃないか」という疑義をぶつける。それは的を得ている。批判の筆は、刃として奥まで斬りつけている。

この批評には評価すべき点と不満な点がそれぞれ二つずつある。まず評価されるのは、ノーベル賞という権威に対してもそれらを取り外して作品として批評する鋭利な批判精神である。昨今、批評家が堕落しているのは、出版ジャーナリズムに迎合して、書評の広告塔になり下がっている状態を脱却できないからだろう。真の批評精神を忘れた出版社のポチが多すぎる。そういう批評事情のなかで、妹尾氏のような斬然とした批評家が出てくるのは、実に喜ばしい。権威をぶった斬るだけの鋭利で揺るぎない姿勢こそが批評の原点だろう。氏はまた戦争への反省や戦後の精神の混乱など、問題意識を深く持って、広く深く読んでいる。量は批評家とすれば当然かもしれないが、問題意識の深さがそれらをしっかり結びつけているところに、思考の深まりが醸成されている。

ただ、少し物足りなく思われるのは、その筆に少し遠慮のような鈍さも伴う点である。もっとはっきり言い切ってもいいのではないか。刃は奥へ届いている。しかし両断するほどには斬り断ってはいない。これは読者に委ねるという方法を加味するのかもしれず、氏の批評スタイルかもしれないが、私としては鮮やかな一閃を期待したい。また、加藤典洋の「敗戦後論」や「敗者の想像力」など、引用に、問題の底に届き切らない不如意さが付きまとう。「ゆでガエル」という比喩で戦後を包み込むには無理がある。問題はもっと深刻で、厳しい状況下にある。砥石はもっといいものを用意してほしいように思う。

●**「小説と詩と評論」**（東京都）338号

三三八号の持続はすごい。愛知の「北斗」が六六〇号だが、これと「九州文学」と並んで、継続三大誌というべきだろう。称揚に値する。主宰者、編集者に敬意を表する。

嶋津治夫氏の「凶作異聞」は、長く農業行政に携わってきた氏だからこそ書けるもので、こういう領域からの意義深い記録随想である。食に関するレポートや歴史的回顧は、重要な問題を孕んでいるにもかかわらず、ありそうでなかなかない。食糧問題は、一見平穏で不自由のない現代の生活のなかで忘れ去られているものの、いったん有事となれば、すぐ露出してくる喫緊の問題である。剥き裸にされればだれでも晒される飢餓の実態を提示することは、けっしておろそかにされてはならないだろう。これに絶えず冷静に目を向けていくことが、一貫した氏の作家としての姿勢で、篤実な作家魂を感じる。江戸時代の安藤昌益、大原幽学の考えや生き方に、当時の農村の実態を照らし合わせて、先駆の意味を掘り起こしつつ、現代の食糧自給の低さに目

を向けて、危うさを警告する筆脈は、足元を抉って、実相を突き付けてくる。実直な筆に信頼が匂う。推薦作。

●**「私人」**（東京都）97号

「サミュエルと仲間たち」（えひらかんじ）はおもしろかった。今作はこれまでの建築の世界を離れてのアメリカ青春時代を描いたもので、六十年代のアメリカの等身大の日常が活写されている。人物の描き方も的確で、それぞれが生き生きと動き、呼吸している。日本とは異なったアメリカの社会、事物が新鮮に立ち現れてくる。四千キロも車を運転して行くメキシコ旅行も痛快で、スケールの大きさを満喫させられる。男女の関係もおもしろい。アメリカを舞台にした小説は土井良一の「カリフォルニア」や高橋三千綱の「葡萄畑」などたくさんあるが、このようにアメリカ社会に深く入り込んで青春を謳歌した作品は希有だろう。読み終わって一つ一つのシーンが胸にいつまでも残る。半世紀前を回顧することが、逆に新たな命を吹き込むこともある。文学の効用だろう。それに加えて一つ言えば、五十年を隔ててインターネットでそのときの友人と連絡が取れて、再会の約束をする。この感激のなかに、生きてきたことの意味を問う感慨が添えられれば、この青春小説はそれ以上の影と意味とを持つだろう。それは次の課題でもある。体験の豊かさとともに、体験の質というものもあって、それも作家にとっては重要であることを教えてくれる。準優秀作ではあるが、この作品を愛する。

今回の優秀作

「かわのほとり」柳沢さうび「北方文学」79号

推薦作

「泰衡の母」森下征二「文芸復興」38号

「カズオ・イシグロ『浮世の画家』を読む―戦争責任をめぐって―」妹尾雄太郎「人間像」106号

「凶作異聞」嶋津治夫　「小説と詩と評論」338号

準優秀作は

「やおよろずの恋」堀江朋子「文芸復興」38号

「サミュエルと仲間たち」えひらかんじ「私人」94号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）